

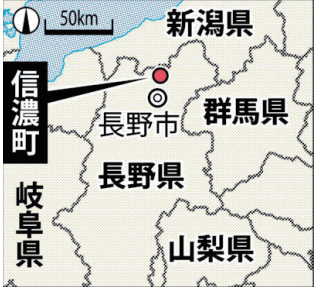


森と海からの
手紙

★1便★

近年まれにみる豪雪で1
月ほどの積雪が残る3月末
の長野県信濃町。信越県境
の山裾にある「アフアンの
森」では、木々の周りから
雪が解けて地表が顔を出す
「根開け」が始まり、シジ
ュウカラたちのさえずりが
春の訪れを告げていた。
英国ウエルズ生まれの
探検家作家のC・W・ニ
コルさん(享年79)の遺灰
は、コナラの木の下の石碑
の中に納められていた。

彼が武道を学びに初来日
したのは、1962年秋だ
った。「四季が育む、世界
でも屈指の多様な生態系に
来日を重ねた。当時の日本
には豊かな自然と、大地に
根差して生きる人の営みが
残っていた。



長野・信濃「アフアンの森」

「根開け」再生の森に春



根開けでドーナツ状の地べたが顔を出した—いずれも長野県信濃町のアフアンの森で3月29日

動植物1540種息づく聖域

経済成長期の開発で山河
が荒廃すると保全活動の先
頭に立ち、80年には信濃町
に居を構えた。荒れ果てた
まま放置されて「幽霊森」
と呼ばれていた10畝の森を
購入したのは6年後。「アフ
アンの森」と名付けて再
生に着手し、今では34畝に
広げて、1540種もの動
植物が息づく日当たりの良
い聖域となった。

彼はその森に、東日本大
震災で家族を亡くした子ど
もたちや、心身に痛みやハ
ンディを抱える人々を招待
した。そして、森に身を置
く日々の中で次第に笑みを
取り戻していく彼らの姿を
見守ってきた。

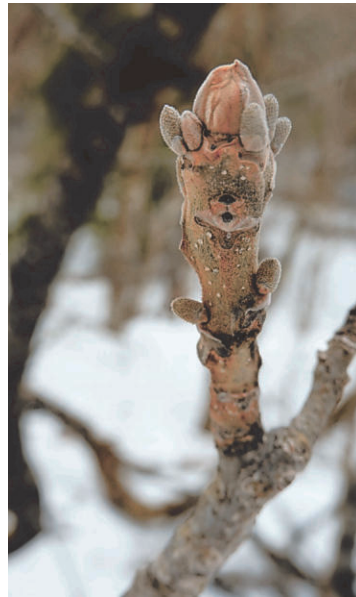
私がニコルさんの知己を
得たのは、30年ほど前の夏
だった。共通の友人である
カヌーイストの野田知佑さ
んらと、カヤックで四国の
清流「四万十川」を下る旅
に出た。

野田さんは世界各地の川
を旅してきた。川をコンク
リート水路に変えて生き
物たちのすみかを奪ってい
く日本の行政にあらがいな
がら、子どもたちに川遊び
の楽しさを伝える「川の学
校」を主宰していた。

四万十の川旅は、山河や
海が子どもたちの遊び場だ
った時代をほうふつとさせ
てくれた。彼は東京都内で入院生活を
続けた。

健康管理には無頓着だっ
た彼の直腸がんが見つか
ったのは、16年の初夏だっ
た。

「森が荒廃すると川や海
も荒れ、人の心も次第にす
さんでいく」。ニコルさん
と野田さんが共有した思い
である。



オグルミの冬芽が、森の妖精のように見えた

【委員編集委員・萩尾信也】
毎月第3火曜掲載